井上アヤ子

もう一度、お母さんと呼んで

まえがき

「交通事故死」目を閉じ、耳を塞ぎたくなる悲しい言葉。誰もが他人事のように、自分だけは、自分の身内だけはあり得ないと考えているように、私達家族もそうでした。

真剣に生と死について考えたこともなく、生きているのを当然と思い込み、平素安易に暮らしてきました。まして愛する息子が、親よりも先に逝く非情な現実もある事など、全く考えてもみませんでした。

そして、そんな私達に悲しい知らせが入ったのは、一九八八年九月十四日、午前二時二十分頃でした。悪夢であるならば、早く覚めて欲しいと思いながら、この現実を否定するものは、何一つありませんでした。

我が子、洋行の事故死という極限の悲しみの中で、私は心の奥底でやるせ無い

思いを、ノートに書きだしました。咽び泣きの涙が乾いては又書きました。こうでもしなければ、辛さに負けてしまいそうになるのを、必死に堪えて書き留めたのです。これが活字になるとは思いもよらず、或る時は仏前で、又は洋行の部屋で、ただ思い出すままに書いたのです。私の辛さを支えているのは、残された一人娘の千鶴と、ただ書くことだったのです。

この様な時、私の母が一冊の本、丸岡秀子の『声は無けれど』を勧めてくれました。この本が私の心を励まし、洋行の二十一年間の回想記と、母親としての私の心の揺れ動く様を、一冊の本にまとめたい気持ちにさせてくれたのです。

洋行は、私達家族に、何も言わないで逝ってしまったのです。しかし洋行は、今にして思えば、私達に沢山の新しい出会いや、思い出を残していってくれました。その出会いが、悲しみの極限を味わった私の心を、どんなに励ましてくれたことでしょうか。人の情けと、温かい思いやりの心に触れて、空気の抜けた風船の様な私の心が、少しづつ膨らんできたのです。

私をここ迄、立ち直らせて下さった沢山の皆様、そして長岡技科大自動車部員の励まし、本当にありがとうございました。

最後に、この本の発刊にあたり、快くお力を貸して下さいました新潟日報事業社の方々に、心から厚くお礼申し上げます。

一九八九年

井上アヤ子

目
次

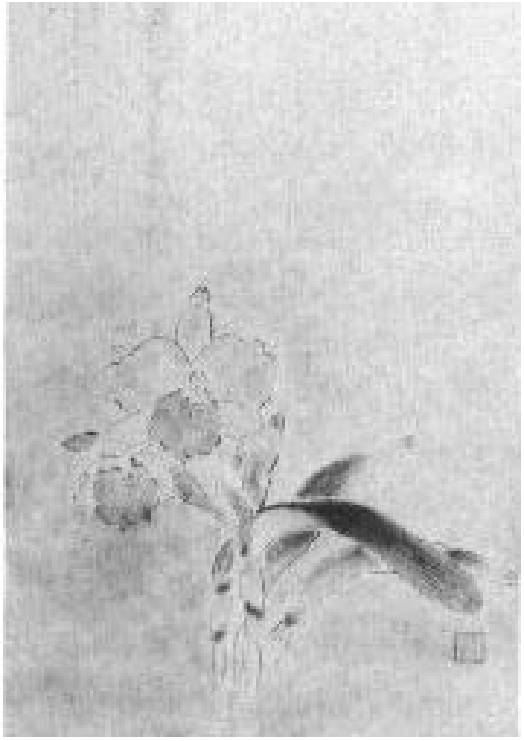
口絵
まえがき
序章 八月にもどりたい　17
第一章 事故、それからの一年　25
予感、真夜中の電話、美しい顔、無常に泣く、無念の涙、無言の帰宅、白いヘルメット、友人に支えられ、美しき髪、薄化粧、懐かしき顔、或る友情、白い鳩と共に、胸に抱かれて、小さな虫、車のわだち、ポークカレー、思い出のコーポアルファ、一人になって、心の迷い、揺れる心、遺品、八月に戻りたい、青春のビテオ、秋晴れの四十九日、洋行の夢、雪の足跡、長岡と聞くだけで、セカンド・バッグ、『ＹＯＵ』、卒業生との別れ、生と死、若者達へ

第二章　残された日記　97
一、残された日記
二、終止符
三、修学旅行
第三章　回想記　133
誕生、幼かりし頃、初めての旅行、妹と共に、転勤、大野小学校での二年間、曽野木小学校時代、中学生時代、ゴルフのクラブ、南高校へ、高校時代、学生服、物真似、或るアイデア、予備校時代、迷いの中での決意、記念樹、技科大一年生、技科大二年生、忘れられない言葉、最後の夕食、最後の電話
第四章　温かな手紙　179
一、悲しみを強さや深さにして　平野　順子　181

二、運命に負ける事なく　中村　幸子　183
三、涙が枯れ果てる迄　安藤喜代子　186
四、花に託して　村上　信子　189
五、自分に負けるな　後藤　清子　191
六、想い出の中の君　嶋　陽二郎　193
第五章　永遠の誕生日　197
一、佐渡の見える丘で　祖母　199
二、五月　203
あとがき

序章　八月にもどりたい

千鶴



八月にもどりたい

あんなに元気だったお兄ちゃんが
車が大好きだったお兄ちゃんが
流れ星のように、アッという間に逝ってしまった
たった一人のお兄ちゃんだったのに
私達に「さよなら」も言わないで

お兄ちゃんが、死んじゃうなんて
こんな事は考えてもみなかった
お母さんは、ワンワン泣いた
お父さんの涙を初めて見た

あんなに大きなお父さんが
小さく、小さく蟻(アリ)のように見えた

私も泣いた、思い切り泣いた
涙の粒を集めたら
小さな泉が出来るくらいに
お兄ちゃんのバカ、バカ、バカ
来年こそ、北海道旅行するんだと
あんなに楽しみにしていたのに

学校から帰ってくると
お母さんのまぶたが蜂に刺されたように
赤く、ふくれあがっていた

たった一人で泣いていたから
毎日、お兄ちゃんの写真の前で
学校での一日を報告した

八月に戻りたい、もう一度でいいから戻りたい
特に八月は不思議なくらい
お兄ちゃんと沢山、沢山話した
佐渡の田舎で
首が痛くなるくらい
夜空に輝く星たちを
毎年、眺めていたのに……

お兄ちゃんは何処へ行ってしまったの

天国へ行ってしまったのかなあ
お兄ちゃんの大好きな 白い車と一緒に
でも一人で 淋しくないかなあ
私も天国へ遊びに行きたい
又私を、隣に乗せてくれないかなあ

悲しい、悲しいバレンタインデー
お兄ちゃんの遺影の前に
白いリボンをつけたチョコの包みが二つ
一つは私から、もう一つはお母さんからよ
ホワイトデーの時は、絶対お返ししてね
お兄ちゃん、もう一度帰って来て

物真似のうまかったお兄ちゃん
又私達のところへ 戻って来てちょうだい
私に又、あの笑顔を下さい
毎日、毎日悲しい顔をしているお母さんに
もう一度〝お母さん〟と呼んであげて
もう一度〝ちいちゃん〟と呼んで下さい